

全世界にヒロシマの心を

山岡 ミチコ



私には、もう青春はかえりません。私の脳裏には、昭和20年(1945年)8月6日の当時の事が、鮮明によみがえって来ます。沢山の友達を亡くし、今でもあの頃の事を思い出すと、悲しみと怒りで身がふるえます。私にはもう青春はかえりません。

あの日、私は、女学校3年生、15歳でした。爆心地から540メートルのところにあった、現在のNTTの広島中央電話局に、自宅から毎日、動員学徒として出勤していました。

父は私が3才の時に他界し、母との二人暮らしの中で、母は私の成長を楽しみにしておりました。母は昭和55年(1980年)2月に他界するまで、私を女手一つで、育ててくれました。

8月6日の広島には雲一つない本当に美しい青空がありました。水の都といわれた広島はとてもきれいでした。

私はその日にかぎって、家を出るのがおっくうでした。思い直して、朝8時前に自宅を出て、広島中央電話局に出かけました。田舎から私の家に来ていた幼いところは、私より少し早く広島赤十字病院へ行くため出かけましたが、未だにどこでどうなったのか、骨すらありません。

「行ってきます」といつもの私のあいさつに、「B29は逃げたけど気をつけてね」との、母がなげかけた言葉を背中に受けながら、急ぎ足で家をあとにしました。爆心地からおよそ800メートルの路上にさしかかった時、B29の爆音が聞こえてくるではありませんか。「警報が解除になったばかりなのに、おかしいな」と思いながら、手をひたいにあて空を見上げた瞬間、「ピカッ」と、ちょうど写真のマグネシウムをたいた、黄色とも青色とも見えるような光を見ました。私の身体は空中に浮き上がり、意識がもうろうとしてきました。「爆弾にやられた!!」と私は思いながら、「お母さん、さようなら・・・」と、心の中で叫んでいました。

それからどの位時間がたったのか分かりません。10分、いや20分位でしょうか。私は意識を失ってしまいました。子供の叫び声で意識がもどりました。残がいの下敷きになって、身動きができないのです。あたりは真っ暗闇です。「誰か助けて!」「お母さん助けて!」と叫び続けました。その時「ミチコ」「ミチコ」と。私の名を呼ぶ母の声が聞こえてきました。「お母さん、ここよ、ここよ」と、私は残がいの中から母を呼びましたが、足だけが残がいの外に出ているだけで、母には私の姿は見えません。「ミチコ!どこにいるの、ミチコ!」と母は呼べども姿は見えずで、私はもうだめかと思いました。「おばさん、火の手が上ってるぞ!早くにげなさい」とさけぶ声がまわりから聞こえてきました。炎の燃え上がる音が私にも聞こえました。「もう助からない!?!」と思いながら、目を閉じました。「兵隊さん、助けて下さい。ここに娘が下敷きになっているんです。」母がやっと気がついてくれました。「兵隊さん、早くこの残がいをのけてください」と、気丈にも母が叫んでいました。やっとの思いで、残がいの中から這い出ることができました。顔が風船のようにふくれ上がっているのが、私にも感じられました。

私はまわりを見て、「ハッ」と、息をのみました。この世のものとは思えない生き地獄の様相を呈していました。頭のない人、死んだ赤ん坊をかかえてぼう然としている人、全身ずるむけの子ども、内臓が破裂している死体、真っ裸の人の列、その惨状は修羅場としか言いようのない有様で、いまでも、私の脳裏に焼き付き、思い出すたびに涙がこみ上げてきて止まりません。内臓の一部を連想させるソーセージはこの 53 年間食べたことはありません。母から「とりあえず比治山へ逃げなさい」と教えられ、母と別れ、私は一人で歩き始めました。母はとるものもとりあえず、まず一番先に私を探しに来てくれたのでした。ですから、家に残した叔父夫婦の安否を気づかい、母はまた自宅へ引き返しました。不幸中の幸いとでも言いましょうか、叔父たちは、ケガをただけで無事でした。

逃げる途中で友人に出会いました。私は、その人の名前を呼んだのですが、彼女には私分かりません。「貴方は誰？」「山岡ミチコよ」と言っても、大きくふくらんで異様な顔をしている私が、友人には信じられなかったのです。私は本当に悲しく、その時初めて火傷の痛さ、熱さを感じました。

比治山は火傷した被爆者で一杯でした。私は火傷の上にテンブラ油をつけられ、休んでいましたら、母に再び会うことができましたので、痛さを忘れて母と抱き合いました。しばらくたって、私は、重傷者の一人として、船で広島市郊外の収容所へ運ばれていきました。船の中では被爆者が次々と死んでゆきました。「次は私が死ぬるのではないだろうか」と観念し、目を閉じて神様に祈りました。

「兵隊さん水をください」と、私はうめきました。その兵隊さんは、「死んでもよければ水をやる」と叱るように言いました。母は見かねて、こっそりと水を飲ませてくれました。それがいけなかったのか、私の様態が急変して悪くなりました。頭髮がすべて抜け、血尿や、血便が出て、死の直前までゆきましたが、何とか、私は助かりました。私の顔はすっかり変わりました。ケロイドが盛り上がり、顔がゆがんでいました。私は、内にこもってしまい、人前には出ないようにになりました。前途に希望を失ってしまいました。私独りでしたら、おそらく自殺をしていたでしょう。私のために、母は入退院を繰り返しながらも働き続けてくれました。私は死ぬることもできませんでした。

昭和 30 年(1955 年)5 月、アメリカと日本の善意の人達に助けられ、手術のために渡米しました。「投下国のアメリカへ行けば殺されるよ」と陰口をたたく人たちもいました。私はもとの体になりたい一心でしたから、善意の人達を信じました。合計 27 回の手術をしました。苦痛の連続でしたが、いちろの望みを託して、私はがんばりました。「戦争さえなかったら！」「原爆さえ落ちなかったら・・・！」と、いつも思っています。

いつまでも暗い殻の中に閉じこもってはいけなないと思い、20 年近くの沈黙を破って、私は、戦争を知らない若い世代に被爆体験を語り始めました。私の命の続く限り、ふたたび被爆者をつくらなために、核兵器廃絶を訴え続けます。核兵器廃絶の道のりがきびしければきびしいほど、なお一層声を大にして、ヒロシマが願う平和の心を叫び続けます。決して無力ではありません。平和は一人一人の努力の積み重ねによって実現するものです。悲願は、核兵器の廃絶と全世界の平和です。